

国語の読む力を育てる

説明文の「自力読みの力」 をつけよう

子どもたちに、説明文を自ら読み進める力をつけさせたい。
こんな願いをかなえる方法を、二瓶弘行先生に伺いました。

子どもたちに 「自力読みの力」を与えよ

言うまでもなく、国語科の「基礎・基本」とは、言葉の力そのものです。けれども、悔しいことです。国語科は、子どもたちに獲得させるべき力が不明瞭であり、何を教えるのが明確でないといわれます。わたしたち教師は、この確実に習得させるべき「言葉の力―基礎・基本」を明確に整理して、国語授業に臨む必要があります。

ここに、「いろいろなふね」という説明文があります。この説明文

での十数時間の授業で、どんな「言葉の力」を子どもたちに獲得させればよいのでしょうか。いくら、船の役目とそのためにつくりがよくわかったとしても、子どもたちの「言葉の力」が向上したとはいえません。「いろいろなふね」の学習を終えた子どもたちが、次に新たな説明文に出会ったとき、ここで学んだ読み方を駆使できるところ、「言葉の力」を獲得したといえます。

説明文を自ら読み進める力「自力読みの力」こそ、国語授業ではよくくむ「言葉の力」です。

「いろいろなふね」で展開した、

説明文の「自力読み」、4年生の学習を紹介しましょう。

説明文の仕組みの指導

まず、次のような説明文の仕組みを指導します。

- ① 文字―ものすくくっぱい
- ② 言葉―すくくっぱい
- ③ 文―14の文(言葉の集まり)
- ④ 段落―14の段落
- ⑤ 小さな部屋―6つの小部屋
(文の集まり＝形式段落)
- ⑥ 大きな部屋―3つの大部屋
(意味段落)

(基本構成「はじめ・説明・終わり」)

※この「はじめ・説明・終わり」は、今後の学習で、「序論・本論・結論」に発展していく学習用語です。

⑦ 文章―ひとつの文章

ここでの学習の重要なポイントは、説明文が複数の「部屋」から構成されていることを理解させることです。この「部屋」とは意味段落を指す、わたしの国語教室のオリジナル用語です。

「3つの大部屋」の検討

「いろいろなふね」は、14の形式段落から構成されています。

筑波大学附属小学校教諭

二瓶弘行

にへい ひろゆき*1957年新潟県生まれ。早稲田大学第一文学部卒業。新潟県内の公立小学校に勤務。上越教育大学大学院の修士課程を修了。1994年から現職。立教大学兼任講師、全国国語授業研究会理事、隔月刊「基幹学力の授業 国語&算数」国語編集長。「夢」の国語教室創造記(東洋館出版社)など著書多数。



音読した後、次のように子どもたちに発問します。

説明文は、「はじめ・説明・終わり」という、3つの大きな部屋からできています。この「いろいろなふね」を3つの大部屋に分けてもらなさい。

ごく単純な構成の説明文で、4年生の子どもたちはあまり苦慮しません。ただ、この段階では形式的な読みにとどまっています。そこで、新たな「自力読み」の段階を指導します。「大部屋の

性格」の検討です。対象となるの

は「はじめ」と「終わり」の大部屋です。これらの大部屋は、次の3つの典型的な性格をもつことを指導し、この「いろいろなふね」ではどの性格をもつかを検討します。

「はじめの大部屋」の3つの性格

- ① 話題の提示
 - ② 問いの投げかけ
 - ③ はじめのまとめ
- 「終わりの大部屋」の3つの性格
- ① 終わりのまとめ
 - ② 問いの答え
 - ③ 筆者の考え・読者へのメッセージ

いろいろなふね

東京書籍「あたらしいこくご」1年下

- ① ふねには、いろいろなものがあります。
- ② きやくせんは、たくさんの人をはこぶためのふねです。
- ③ このふねの中には、きやくしつやしょくどうがあります。
- ④ 人は、きやくしつで休んだり、しょくどうでしょくじをしたりします。
- ⑤ フェリーボートは、たくさんの人とじどう車をいっしょにはこぶためのふねです。
- ⑥ このふねの中には、きやくしつや車をとめておくところがあります。
- ⑦ 人は、車をふねに入れてから、きやくしつで休みます。
- ⑧ ぎよせんは、さかなをとるためのふねです。
- ⑨ このふねは、さかなのむれを見つるきかいや、あみをつんでいます。
- ⑩ 見つけたさかなをあみでとります。
- ⑪ しょうぼつていは、ふねの火じをけすためのふねです。
- ⑫ このふねは、ポンプやホースをつんでいます。
- ⑬ 火じがあると、水やくすりをかけて、火をけします。
- ⑭ いろいろなふねが、それぞれのやく目にあうようにつくられています。

この大部屋の性格を考えるためには、文章全体を詳しく読み返すことが求められます。

「はじめの大部屋」は、すぐに「話題の提示」の性格にとらえられます。「問いの投げかけ」なら、「なぜ、〜でしょうか」や「どうしてでしょう」などの表現が使われます。また、「はじめのまとめ」としては、「ふねには、いろいろなものがあります。」では弱いのです。

次に「終わりの大部屋」の性格を検討します。「問いの答え」の性格は、「はじめの大部屋」の性格が「問いの投げかけ」であることに対応することが原則なので除外します。「筆者の考え・読者へのメッセージ」までは述べられていません。したがって、「終わりのまとめ」の性格であるのとらえることが妥当です。

この大部屋の性格を検討することは、実は、大きな意義があります。説明文の読みの学習は、その説明文の筆者が読者である自分に最も伝えたいことを正確に受け取る力を獲得することが、まず目標であると考えています。

さらには、その伝えたいことがどのように述べられているか、その表現の仕方が学びの対象となります。

そして、究極的には、その伝えたいこと（筆者の考え・認識・思想）に対する自分の意見をもつことが、説明文を読む最終ゴールです。

説明文は、その「まとめ」（伝えたいこと）の中心（が）どの大部屋に述べられているかにより、大きく次の3つに分類できます。

- ①「頭括型」――「はじめの大部屋」に
- ②「尾括型」――「終わりの大部屋」に
- ③「双括型」――「はじめ」と「終わり」の大部屋に

特に「まとめ」がどこに述べられているかを把握することは、筆者の伝えたいことを受け取るために、きわめて重要な学習となるのです。

「説明の大部屋」の検討

次の「自力読み」の段階を子どもたちは学ばなければなりません。本論に当たる「説明の大部屋」の検討です。

1 「説明の大部屋」を「小部屋」に分ける

子どもたちに指導をします。

大部屋は、いくつかの小さな部屋からできています。そして、その小部屋には、それぞれ「部屋の名前」がついています。この「いろいろなふね」の「説明の大部屋」がいくつかの小部屋からできているのか、どんな名前をつければいいのかを考えましょう。

この「小部屋」は意味段落を指します。形式段落の内容を読み取り、新たなまとまりをつくる段階が、この「大部屋を小部屋に分ける」という学習なのです。

多くの子どもたちは、抵抗なくすぐに4つの小部屋に分けました。

2 「小部屋」の名前を考える

子どもたちに、部屋の名前を考えることの意味を説明します。

「説明の大部屋」を4つの小部屋に分けました。部屋には必ず名前があります。

みんなが家族で旅行するとき、日本旅館に泊まったことがあるでしょう。ホテルの部屋は203号室と、このように数字で部屋を呼びま

す。けれども日本旅館では、「朝顔」とか、「富士山」とか、それぞれに名前がつけられています。その名前もバラバラではありません。例えば、「朝顔」の隣の部屋は「すみれ」というように、関連を考えて、花の名前で統一しています。この日本旅館と同じように、小部屋には名前があります。その名前を自分でつけられたときには、はじめて小部屋になるのです。

続けて、小部屋の名前を考える際の3つの重要なポイントを指導します。

①「きょうだい」の名前のように

「きょうだい」の名前は、日本旅館の部屋の花の名前と同様に、親は何らかの関連を考えてつけるものです。例えば、一郎、次郎、三郎のように、4つの小部屋の名前も「きょうだい」のようにつながりを用意することです。

②「大切な言葉」を読み落とさないで

それぞれの小部屋に書かれている言葉の中で、「大切な言葉」を探すことです。例えば、その説明文の題名に関連する言葉、文章中に繰り返し反復される言葉を読み落とさないことです。そして、それらの「大切な言葉」が小

部屋の名前に使えないかを考えてみることです。

③まとめが書かれている「大部屋」の内容を大切に

今は「説明の大部屋」の学習をしていますが、その際にも、ほかの大部屋、特に「まとめ」が書かれている「大部屋」の内容を大切に、小部屋の名前を考えることです。

以上3つの名前つけのポイントをもとに、子どもたちは小部屋の名前を考えました。

●小部屋1ー「きゃくせん」

●小部屋2ー「フェリーボート」

●小部屋3ー「ぎよせん」

●小部屋4ー「しょうぼうてい」

いずれも船の名前で、「きょうだい」の名前のように関連性をもちます。また、それらは各小部屋の最も「大切な言葉」でもありません。

低学年段階では、このような意味段落（小部屋）の小見出し（小部屋の名前）を考えるレベルで十分な学習であります。

3 「小部屋」の名前をより長く

中学年段階では、さらに指示します。

みんなは、ひとつの言葉（単語）で名前をつけました。もう少し、言葉をつけ加えて名前を長くすることはできませんか。名前つけのポイントの③「まとめが書かれている「大部屋」の内容を大切に」を参考にしてください。

子どもたちは、再度、文章全体を読み返します。そして、まとめが書かれている「終わりの大部屋」14段落に書かれている「役目」に着目しました。

この「役目」がどのように各小部屋で説明されているかを検討して、各小部屋の第1段落目が「〜するため」という「役目」を説明する表現に気づきました。

納得した子どもたちは、各小部屋の名前を「客船の役目・フェリーボートの役目・漁船の役目・消防艇の役目」と変えました。

さらにわたしがこう尋ねます。

各小部屋のひとつ目の段落が「船の役目」の説明だとわかりました。では、2段落目と3段落目は何の説明をしているの？

子どもたちは、「終わりの大部

「屋」の「あうようにつくられてい
ます」の表現から、「船の役目と、
それに合うつくり」という名前を
引き出しました。

以上に述べてきた「小部屋の名
前つけ」は、まさしく説明文の
「自力読みの力」を子どもたちに
獲得させることなのです。

小部屋の一文要約と 文章全体の要約

さらに、学習を進めます。

この小部屋の内容を、重要な言
葉を落とさず、一文で短くまとめ
ること、「一文要約」(意味段落の
要約)です。中学年段階の重要な
「自力読みの力」といえます。

この一文要約のもとになるの
が、「小部屋の名前」です。単語レ
ベルの名前から、重要な言葉をつ
け加えて名前を長くしていく学
びについて前述しました。この学
習は、まさに「一文要約」に直結
していきます。

●小部屋1の「名前」

客船の役目とそれに合うつくり

●小部屋1の「一文要約」

客船は、たくさんの人を運ぶ役

目のため、客室や食堂がある

このような「小部屋の一文要
約」を4つの小部屋でも同様に試
みることによって、文章全体の要
約も可能になっていくのです。

説明文の 「美しい仕組み」

このように、4年生の子どもた
ちは、「いろいろなふね」を用いて、
説明文の「自力読みの力」を学習
してきました。そして、まとめと
して、その「美しい仕組み」を、次
の表のように整理しました。

終わり	説 明				はじめ	大部屋
14	4 11 12 13	3 8 9 10	2 5 6 7	1 2 3 4	1	小部屋と段落 小部屋の名前
※性格・終わりのまとめ	消防艇の役目と それに合うつくり	漁船の役目と それに合うつくり	フェリーボートの役目と それに合うつくり	客船の役目と それに合うつくり	※性格・話題の提示	

説明文「自力読み」の学習過程

—筑波大学附属小学校・二瓶弘行学級 2009改訂—

- ①基本構成「序論・本論・結論」を大まかに把握する。
※三つの大きな部屋「はじめ・説明・終わり」
- ②序論(はじめ)と結論(終わり)の性格を把握する。
 - 「序論」の典型的な三つの性格
①話題の提示 ②問いの投げかけ ③はじめのまとめ
 - 「結論」の典型的な三つの性格
①終わりのまとめ ②問いの答え ③筆者の考え・提案
- ③意味段落に分け、小見出しをつける。(部屋の名前)
 - ※中部屋・小部屋(意味段落)の名前(小見出し)
 - 重要語句・大切な言葉への着目(反復される言葉・題名と関連する言葉)
 - 意味段落相互の関係 ●結論部分(特に「終わり」の大部屋)の重視
- ④意味段落の論の展開を検討する。(部屋の並べ方)
 - 順序性(時間的順序・事柄の順序):「ナンバリング」[一般から抽象へ][身近の例から]
 - 意見と事実(意見とその根拠・理由となる事実)
 - 原因と結果
 - 指示語(こそあど言葉)の意味 ●接続語(つなぎ言葉)の役割
- ⑤意味段落の要点をまとめる。(部屋の一文要約)
 - 意味段落の小見出し(部屋の名前)をもとに。
- ⑥文章全体を要約する。
 - 意味段落の要点(部屋の一文要約)をもとに。
- ⑦文章の中心(要旨)をとらえる。
 - 筆者の伝えたい「事実」、「考え・意見」の中心
- ⑧筆者へのメッセージをまとめる。
 - 筆者の伝えたいことについて、自分の意見をまとめる。
 - 伝え方(論の展開の仕方)について、意見をまとめる。

どの説明文にも、その文章を書
いた筆者がいます。筆者は、自分の
伝えたい事実や考えを読者にわか
かってもらうために、様々な工夫
をしながら、文章を書きます。
その最も重要な工夫が、「美し
い仕組み」です。つまり、優れた説
明文はどれも、「美しい仕組み」を
もっているということです。
だから、一見して難しそうな説
明文でも、読むことを躊躇しては
いけません。どんな説明文にも筆
者がいて、筆者は読者であるあな
たにわかってもらうために、「美し

い仕組み」を考えながら、文章を
書いているはずですから。

これまでに述べてきた一連の学
習は、この説明文の「美しい仕組
み」をとらえる基本的な過程を
学ぶことにほかならないのです。
この読みの過程を獲得した子
どもたちは、新たな説明文を自ら
の力で読み進めていくことができ
るのです。「自力読みの力」です。